



W.A.Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第36号



## ああモーツァルト、聴くも語るも奏するも

モーツァルトへの手紙 (その12)

会員番号 K.618 加藤 明

世界中のモーツァルティアンがあなたをものにしようと様々な形容をほどこしては無残にも擦り抜けられ、突き放されてきました。しかし、人々はこれからもあなたへの接近を怠らないうでしょう。あなたはそういう人であり、あなたの音楽はあなたの意思を超えて世界に羽ばたき続け、人々の生活に善なる響きを奏でていくでしょう。

現に、或る者はあなたの曲を演奏し、或る者は編曲を試み、また或る者はあなたを聴き続けながら語り尽くそうと苦心を重ねてきました。かく言う筆者もそうした無謀な接近を止められない一人ですが、きっとあなたを「鏡」にし、己を照らしては持て余す己れに気づこうとしているに違いありません。もうあなたの「目標」であった厳粛な死をものにしてから225年にもなろうとしている今日でも、その惨いほどの苦心惨憺は止むことを知らないのです。ああモーツァルト、聴くも語るも奏するも、と今日もひとりごちて。

果てしないモーツァルトへの憧憬を孕みながら、優に1年以上もの準備期間を要した《「モーツァルト広場」20th コンサート》が7月24日に実現しました。

アトリオン音楽ホールでは10周年に続き2回目のコンサートでした。

主催者を代表して、会場にお越しくくださった多くの会員やモーツァルトファンの皆様、熱演してくださったマエストロ各位と幹事諸兄はじめ多くの協力してくださった皆さんに感謝の念でいっぱいです。

私にとっては深く心に刻印された正に「記念」コンサートになりました。

その「記念」は私に静寂を保ちながら巨大なわだち轍のような人生の時間をつくり、三ヶ月を経過した今でも私はその轍のなかで遊泳しています。

すべてのプログラムのリハーサルに立ち会わせてもらいましたが、いつものごとくモーツァルトの「音づくり」の現場は、張り詰めた厳粛さと名状しがたい熱気に包まれ、つい我を忘れ

るほど圧倒されたものです。

私にとって、モーツァルトを「なまで聴く」ことは、それがどんな形式の曲であっても、この上なく官能的で全身の神経に鳥肌がたつという、いわば完璧に浄化（リセット）される体験そのものに違いありません。

どうも、そのような浄化作用が脳内に特異な習慣性を植え付けたようです。

モーツァルトの生音を聴くと「懐かしの故郷」に帰ったような気分になるのですが、これは一種の麻薬患者にも似た症状と言えるかも知れません。

今回のコンサートで代表として、ステージ上で開演に先立って、短い挨拶をしました。

その挨拶の直前、ステージの袖に立ちながら、この20年余の月日の中で、あの世に逝った会員の一人ひとりを想い浮かべていました。

『モーツァルト広場』の100名を超える現会員のうち、すでに7名の物故会員が《永久会員》として、不動にして燦然とその名を連ねておいでです。

そのほとんどの方が設立して間もなく入会されたメンバーでした。

「春への憧れ」、「ソナチネK 545」、「40番の交響曲」、「ホルン協奏曲一番」、などモーツァルトを語るうえで不可欠な名曲を登録番号としてお持ちの熱烈なファンでした。

想い浮かべたのは、きっと、「春への憧れ」と「ホルン協奏曲一番」が今回のプログラムに組まれていたことが、影響していたのかも知れません。

とりわけ、「春への憧れ」のK氏と「ホルン

協奏曲一番」M氏のお二人は発足当初から私を激励してくださった大先輩でしたから、天空からきっと笑顔でお聴きになっていたのでは、と想っておりました。

今回の20th コンサートは、幹事諸兄はもとより、こうしたかつてのお仲間の励ましと支えもあって実現できたものでした。

当たり前ですが、人は誰しも生き物として親から貰い受けた命を全うすべく、日々を過ごしています。

自死以外は、いつ天に召されるかを知る者はいないわけです。

それは正に理由なくこの世に生を享け、自らは生きる時代や場所を選択できないことと同義です。

それぞれが日々の「生の現場」と直面しつつ存在するのですが、突発事故は別にして、死は予告なく向こうから忍び足でやってきます。

実は私自身にもそんな「死の忍び足」体験がありました。

20th コンサートを翌月に控えた6月にガンの摘出手術を受けました。

甲状腺のガンでしたが、お陰様で他に転移もなく、短い入院期間でどうにか元の日常生活に復帰することができました。

ガンを知った当初は、翌月に迫った20th コンサートのあれこれを考えて、手術するべきかどうか、随分フラフラ心が揺れ動きました。

サイドブレーキをかけたまま仕方なく運転する車に乗っているような気分とでもいいですが、とにかくスッキリしませんでした。

恥ずべきことに、周囲からは早期の手術を催

促され、旧い親友からは臆病な姿勢をひどく叱責されたりもしたものです。

ところで、この甲状腺ガンを最初に診察し、精密検査を受けるよう専門医に紹介状を書いて下さったお仲間の内科医がいらっしゃいます。

当「広場」の発足間もないころからの熱心な会員 (K 239) T 氏です。

今年の2月、再就職に当たって健康診断書の提出を求められ、「かかりつけ医」である T 氏に診断を依頼した際に「発見」されたものでした。

喉の腫物を触診されて、「加藤さん、これは心配だから専門の先生に見て貰ったほうがいいね・・・」と。

この信頼する T 氏の抑制の効いた一言が私をガンという「死の忍び足」から救ってくれた、というわけです。

S 病院でのガンの摘出手術が無事に済んだある日、入院中の私をご丁寧に T 氏夫妻がお見舞いに来てくださいました。

素敵なお花をお持ちになりながらです。

「良かったですね・・・」、T 氏のいつもの穏やかな声とにこやかに澄んだ瞳、慎ましい奥さんのやさしい表情に接し、とても癒されたものでした。

お見舞いの効能は「その時」であるよりは、お見舞いを終えた後の余韻の豊かな気分にごそあるのだ、ということはこの時に知りました。

その意味でも、有り難い気づきを T 氏夫妻から頂いたと思っています。

その後、このような顛末があって、「人はい

つしか自らが胚胎した病によって、途上のまま生を終えるのだ」、という実感が湧いて来たものです。

我がモーツァルトその人もレクイエムやホルン協奏曲(当日の演目)を俟つまでもなく、無念極まる「途上の死」を迎えたのでした。

考えてみますと、最後のピアノ協奏曲といい、今回のアニバーサリーコンサートは、モーツァルトの「生と死」に深くまつわるプログラムが組まれていたのですが、これは偶然そうなるまで、なのですが。

それはそうと、「ピアノ協奏曲 K 595」の久元祐子氏はじめ、「フルートとハープのための協奏曲」の菅原潤氏と田中素子氏、「ホルン協奏曲」の筑波義厚氏、指揮の阿部未来氏、コンサートマスターの駒込綾氏、そしてオーケストラのメンバーの皆さんと、音楽への深い愛情と優れた技巧のマエストロに彩られたモーツァルトは実に聴きごたえのあるものでした。

別けても、当広場の名誉会員でもある久元女史のヴェーゼンドルファーによる澄み渡るピアノの音色には改めて感嘆してしまいました。

アンコールの「トルコマーチ」には訳もなく唸ってしまうなど興奮。

あの現場に居合せた喜びは私の中で言葉にならないものでしたから。

次のアニバーサリーは「25th のサマーコンサート」になるようです。

女史には密かに(?)「25番の八長調」を奏でて頂こうと目論んでいるところです。

end



## 特別寄稿

名誉会員 久元 祐子

モーツァルト広場20周年おめでとうございます。代表の加藤明さんはじめ、幹事の皆様のご尽力、絆、そして何よりモーツァルトへの愛情の賜物と存じます。今後、25周年、30周年とさらなる発展をお祈り申し上げます。

第3回のモーツァルト広場サマーコンサートで「ジュノーム」を初めて共演させていただいて以来、10年以上のお付き合いが続き、ソロ、室内楽作品など様々な曲を演奏させていただいてまいりました。心から感謝申し上げます。

今年の7月24日の20周年アニバーサリー・コンサートでは、ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調

KV595をモーツァルト広場アンサンブルの皆様と共演させていただきました。指揮は秋田出身の若きマエストロ、阿部未来さん。阿部さんは神奈川フィルの副指揮者をされており、これまで私が神奈川フィルとモーツァルト・シリーズで共演させていただきました際にもリハーサルでバランスを聴いていただいたり、大変お世話になってきました。今回、秋田で思いがけずご一緒できましたのは、モーツァルトが導いてくれたご縁のようで、嬉しいことでした。アーティキュレーション（音の区分法）やデュナーミク（強弱）など前もって綿密に意見交換をしてから秋田入りできたのも有難かったです。そして今回二人でこだわったことの一つに、モーツァルト時代のリピーエノ・パートのことでした。当時、弦楽オーケストラに独奏者とリピーエノ奏者（トゥッティ奏者）を区別する習慣があり、ピアノ・ソロパッサージュの伴奏の

箇所では、弦楽器奏者全員ではなく一部の奏者のみが分担する習慣があったことです。モーツァルトの楽譜には明らかに区別して書かれています。現在、実際のオーケストラで行われることは殆どありません。今回モーツァルト広場アンサンブルの皆さんが、第2楽章で協力してくださり、阿部さんにとっても私にとっても初めの挑戦が叶いました。このような奏者の“冒険”にも応えてくださる温かさが秋田にはあり、一緒にアンサンブルを作っていく中で響きが一つに纏まっていく過程はかけがいのない時間です。

モーツァルト最後のピアノ協奏曲である第27番の第3楽章は「春への憧れ」のメロディーと結び付けられることが多い楽章です。悲劇の主人公として語られることの多いモーツァルトの晩年ですが、最近の研究では、モーツァルト最後の4年は「栄光への門出」であった（クリストフ・ヴォルフ著『モーツァルト最後の4年』より）とされています。斬新な研究成果を踏まえて、あらためてこの曲を見ますと、第3楽章の旋律からオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」のドラベラのアリア「恋は泥棒」が想起されます。

KV331の自筆譜発見に基づくCDを本邦初リリースさせていただいたのが昨年。これら新しい発見や研究成果を演奏に生かしながら、これからもモーツァルトを追い求めていきたいと思っています。

## 続「新芸術文化施設に期待すること」

会員番号 K.10 畠 山 久 雄

友人に、「秋田県民会館は音が悪くてね。」という話をしたところ、『それはスピーカーが悪いのか、アンプが良くないのか。』と言う。どうやら、演奏は全てマイク、アンプを通してスピーカーから音が出ると思っているらしい。生の演奏を聴く機会皆無の友人が、そのように思うのも無理からぬこと、この世はスピーカから出る音で満ち溢れている。中でも際立っているのはカラオケであろう。

さて、例会では、冒頭のアヴェ・ヴェルム・コルプス、お別れのホルン協奏曲こそCDを使い、音はスピーカから出ているが、演奏にマイクやスピーカーは使用していない、いわゆる生演奏である。CD等を再生する以外、拡声器を使用してもそれは生演奏という解釈もあるが、この稿では拡声器を通さない歌声や楽器の音色を生演奏と呼ぶことにします。

生演奏の準備は会場選びから始まります。例会など、百人未満であれば、これまでのハーモニーホールやヴァレリアーノで充分です。それ以上に多くのお客様に聴いていただく場合は、ジョイナスホール（150席）さらには文化会館小ホール（400席）、アトリオン音楽ホール（700席）、文化会館大ホール（1,188席）、県民会館ホール（1,839席）等、お客様が皆座れて、決してガラガラにならないことが理想です。

アニバーサリーコンサートは第10回も、今年の第20回もアトリオン音楽ホールでした。ご承知の通りアトリオンは良い音がするホールということで全国に知れ渡っています。もちろん良い音とは生演奏の音を指します。アトリオンはどうして音が良いのでしょうか。

第1には音楽ホールのステージに緞帳がない

ことです。普通の多目的ホールには緞帳があり、ステージの真上には緞帳を格納するための巨大な空間があるのです。せっかくの生演奏の音が、その空間に吸い込まれるのを防ぐために、音響反射板が必需品のように附属しています。しかし、密閉はできないので客席に到達する音量・音質は低下します。

第2には客席から見たステージの形状です、音楽ホールはステージから客席が切れ目なく繋がって、ステージが□に見えます。（写真参照）一方、県民会館などの多目的ホールは、ステージと客席の間には額縁のような立派な仕切りがあり、客席から見ると□□に見えます。生演奏の場合、□に見えるステージの方が□に見えるステージより、遙かにお客様に達する音



良い音のホールは、客席から見ると□に見えます



音が悪いホールは、客席から見ると□□に見えます

が良いことが、経験的に知られています。なお、写真は単なる例です。

先日、県民会館ホールで開催された「ソフィア・ゾリステン&リヤ・ペトロヴァ名曲の花束」を聴きました。名手の集まりであり誠実な演奏にもかかわらず、音量も小さく線が細く聞こえました。県民会館は多目的ホールであること、□に見えるステージであるからです。演奏者も私と同様にながかりしたことでしょうが、挫けることなく誠実に演奏したのは流石でした。

同じ演奏をアトリオン音楽ホールでしたら、演奏者も聴衆もどんなに幸せだったことでしょう。では、主催の秋田朝日放送はどうして生音の悪い県民会館を会場に選んだのでしょうか。

お気付きの通り理由は単純、客席数の関係です。生演奏の経費を700席で賄うか、1,839席で賄うか、チケット価格に大きく影響します。

ところで、検討中の県・市連携文化施設には、2000席のホールが計画されています。建設担当者が前述の2点をしっかり理解して、演奏者や聴衆をがっかりさせるホールにならないよう祈る思いであります。また、不幸にも県民会館を解体することになった場合、演奏ツアーにおいて秋田がスルーされたり、チケット価格が高騰したりといった悪影響が4年も続き、秋田の文化レベルがじわりと低下し続けることに気を揉んでおります。

※ 会報35号の「新文化施設に期待すること」という記事の最後に（続く!）と書いたので、続けました。

## モーツァルトと俳句、その交響的試論（1）

会員番号 K.504 朝 吹 英 和

交響曲第38番ニ長調 K.504

傑作の多い交響曲の中では取り分け第38番「プラハ」の魅力に惹かれる。6月生まれのせいもあってか5月下旬から6月上旬にかけて関東地方の梅雨入り前の季節が一番好きである。

第一楽章の荘重で緊張感漲る序奏に続いて駿馬の如くしなやかで力強いアレグロの主題がクレッシェンドしつつ夏野を駆け抜ける。対位的な展開と頻発するシンコペーションの揺らぎが綾成す躍動感と愉悅感に満ちた世界。光と影の交錯する時空を切り裂いて前進する音楽のシャープなエッジ。闇の底から初夏の輝きへの鮮烈な転位、「光の槍」に刺し抜かれて精神の夏が輝く。何時聴いても心が躍る音楽である。

プラハで大成功を収めた「フィガロの結婚」の上演が契機となってモーツァルトに届いた1通の招待状。1787年1月11日、コンスタンツェ

を伴ってプラハに到着したモーツァルトは「フィガロの結婚」の上演に先立って開催されたコンサートでこの交響曲を指揮して初演した。

作曲された年代はアラン・タイソンの研究によれば1786年の初め頃と推定されており、丁度モーツァルトが「フィガロの結婚」の作曲に没頭している時期と重なっている。（オペラは1785年秋から1786年春にかけて作曲）

「プラハ交響曲」はフィガロのアリア、スザンナとケルビーノの二重唱の旋律やリズムとの類似性が指摘されているが、全曲を貫く有機的な肉体感には正に「フィガロの結婚」の世界と通底しており、随所に「フィガロの結婚」の木霊が聴こえるのも「プラハ交響曲」の魅力である。

折しも創作活動の絶頂期にあったモーツァルト。精神の夏の輝きが眩しい。

麦秋の対角線の勁さかな

英 和

クラリネット協奏曲イ長調 K.622

来し方を振り返って回想に耽る時、やがて訪れるであろう永遠の安息の時をも垣間見るように穏やかな時空。モーツァルトのクラリネット協奏曲第二楽章に一貫して流れる時間は、内省と慈愛に溢れている。陽が傾き、暮れなずむ頃の静寂と一抹の寂寥感に包まれた空を遥かに鳥が飛んでゆく。

第三楽章は一転して只管に流れゆく川のように自然な時間の経過の中で、翼を得たモーツァルトの感性が煌めきながら自由に飛翔する。

流れゆく雲や空を飛ぶ鳥の様に重さを感じない軽やかな世界の広がり。繰り返し聴いても、「終わりの中に内包された始まり」を感じさせる自由自在な音楽。

ロンド形式の旋律に象徴される巡る時間を支えているものは、存在の原型であり、生命の本質が持つ無名性、循環性、回帰性を持った「自由」に他ならない。全てのものから解放された自由が感じられるモーツァルトの音楽。その創造の源泉は何処にあったのであろうか。

この秋は何で年寄る雲に鳥 芭蕉

掲句は芭蕉が亡くなる僅か半月前の作品である。芭蕉とモーツァルト、芸術創造の源泉の一つが旅であった東西の旅人がその生命の果てに到達し感得した世界の不思議な一致。輪廻転生の表象としての「雲」と「鳥」が象徴する「自由」が悠久の時間を支えている。

※「日本モーツァルト愛好会」副代表

## 酒とモツの日々 (36)

会員番号 K.488 佐藤 滋

7月のアニヴァーサリーコンサートは素晴らしい演奏会でした。奏者だけでなくお客様も素晴らしいかっと思えます。音楽を心から楽しんで、さらに演奏者を「その気」にさせる温かい聴衆でした。「モーツァルト広場」は秋田にも素敵な聴衆が居ることを実証しました。

さて、広場会員には常識で恐縮ですが、音楽ホールは「私語」や「飲食」を固く禁じています。それは聴衆へのマナー違反であると同時に、演奏者に対しても失礼で「お前の演奏より私の方が大事！」と放言しているようなものだからです。よくTVのトーク番組でゲストが語っている途中で割り込み、より大声で自分の方に聴き手の関心を引き寄せる人が見られます。それが偉いコメンテーターやMCの権利であるかのように。

「ぼくは子どものころ、あんまり親にこっぴ

どく叱られたことはないんだけど、一つだけ骨身に徹して覚えていることがあります。自分の子どもにも同じように言ったことがあるんだけど、それは人が話をしているときに横から割り込むなということなんです。よく、子どもって自分の欲求が強いと、「ねえねえ」って人が話しているときに入ってくるじゃないですか。大人でも結構そういう人がいますけどね・・・」

(声に耳をかたむける：谷川俊太郎)

演奏会の「私語」の多くは演奏批評や、曲についてのうんちくですが、世に言う「通」はこの知識がたしかに半端ではありません。ケッヘル番号や作曲の背景を全て記憶している「知識」の持ち主といえばモーツァルト広場代表の加藤氏もその一人と言えましょう。(ただし氏は「知識」と「マナー」を兼ね備えた「知性」

の持ち主です) こういう人は世間に珍しくなく、小説「ケッヘル」(中山可穂:著)にはこのような人物が登場します。(なんとケッヘル番号に関連した連続殺人事件のお話。)性描写がきついで万人むけではありませんが、至る所に、学者や評論家には書けない小説家ならではの「楽曲解説」があります。例えば・・・

「夢の醒め際のキスはね、k 332のアダージョに一番よく似ています。モーツァルトのピアノソナタ12番の第2楽章。甘いけど甘すぎず、あたたかさの中にむなしさもある。弾いているとそこはかたなく寂しくなるけれど、この指から世界がこぼれ落ちてゆく不安はない。すこし明るくてね、うっすらと暗いの。天気雨みたいな感じ。ちょっとせつない。でも、せつなすぎないのがいい。今度会ったときに弾いてあげるよ。腕によりをかけて。」(ケッヘル:中山可穂)

これは音楽を愛する「小説家」から、ピアノを演奏する「音楽家」への提言とも言えます。「演奏」とは指で打鍵することではなく、指に語らせるもの。「私語」に酔っている聞き手と同様に、自分の演奏に酔っている人は音楽を愛しているのではなく、美しい音楽に陶然とする

自分を愛しているにすぎないのです。

「ぼくが幸運に恵まれていることは認めますが、作曲はまるっきり別の問題です。長年にわたって、僕ほど作曲に長い時間と膨大な思考を注いできた人はいません。有名な巨匠の作品は、すべて念入りに研究しました。作曲家であるということは、精力的な思考と、何時間にも及ぶ努力を意味するのです。」

(モーツァルトの手紙)

どうか演奏する人は楽譜の向こう側にある世界を敬い、思考し、感じ取って下さい。

「何事のおはしますをば知らねども かたじけなさの涙こぼるる」(西行)

そして広場会員の素敵な聴衆の皆様。そんな「演奏」には、「耳」だけでなく「目」と「心」で、「聴」(文字どうり耳+目、心)いてあげてください。命を削る覚悟で、全身全霊で奏でた音楽は、きっと皆様の心を揺さぶるに違いありません。

「虫が鳴いている いま 鳴いておかなければ もう駄目だというふうに鳴いている しぜんと 涙をさそわれる」

(八木重吉:百年の手紙)

## 事務局より

歳を重ねると1年があっという間に過ぎてゆく感じがします。今年自身の転職(保育園事務長)と自分の会社経営、講演活動などのトリプル生活に日本女性会議2016の企画運営、それぞれ学校が異なる4人の子どもの行事への参加と音楽活動もほとんどすることがなく師走を迎えた気がいたします。そういえばストレスから病気になったのも今年の出来

事。来年こそは腰を落ち着けてやることをそぎ落としゆっくりとした音楽活動ができるようにしたいところですね。

モーツァルト広場も21年目に向けて新たなスタートを切りました。これも偏に会員の皆さんの愛情だと思います。これからもたくさん皆さんの愛情を注いでくださいますようお願い申し上げます(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H28年12月現在95名)

モーツァルト広場

検索

入会金: ¥2,000 年会費: ¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田(事務局) 080(1673)8322